

追増補冊子版

「シヨタコンのゆりかご」

shofa-com

since 1981

「シヨタコンのゆりかご」

(ひびき)

* 無償頒布 *

「ショタコンのゆりかご」

「ショタ」と言う言葉の生い立ち

ぶどうつくりくすく

(二〇〇六年一〇月二十九日初出)

「ショタコン」という言葉が生まれてから二五年。

「ショタコン」が「ショタ」と言う形になって色々変わったように感じられるものもあります。

「ショタコン」という言葉が生まれた頃を、少し振り返ってみましょうか。

今は無きラポート社から発行されたアニメ雑誌『こた煮雑誌』「ふあんろーど」第五号(八一年五月二十五日発行)の七四ページで「ショタコン」と言う言葉はポロリと生まれました。

『女の人が小さな男の子を好きなのはなんと言えはいいんでしょか』と言う相談の回答のための言葉としてとりあえず、ロリコンの逆パターンを示すための言葉として。

その「ポロリ」と生まれた言葉にひかれた人が結構いらっしやったのでしよう。

年明けて『ふあんろーど』一月号(八二年一月二十五日発行)にて『アニメからオリジナルまで 少年キャラ特集』と言う記事がカラー見開きグラフィア付計十一ページで展開されました。

そこで「ショタコン」の語源が改めてしめされましたが、ここで一つ認識のずれが発生したのです。

『ふあんろーど』五号の相談の回答に『正太郎君が好きになったショタコン云々』とありましたが回答をした人の脳内では「正太郎君」横山光輝作の『鉄人28号』と言うマンガの主人公並びにそのマンガを実写化した時の子役さん、と言うイメージがありましたとか。(傍注一)

ですが、特集記事で語源として紹介された「正太郎君」はそちらではなく当時リメイクして放送されたアニメ版(傍注二)のキャラだったのです。

実はこれは結構大きなずれなのです。

「鉄人28号」の原作は第二次世界大戦後間もない頃を舞台にしておりましたが、リメイク版は近未来を舞台として設定してありました。当然服装も少し違っておりまます。共通しているのは半ズボン着用という一点程度でしょう。

この二人の正太郎君の着用していた半ズボンが「ショタコン」という言葉のイメージを形作ったと言うことはまづいえましよう。半ズボンが似合うこと「ショタコン」の条件とはっきり明言されたわけでは「ごいませんが、一つの条件に相当する要素になったとはいえましよう。

「ショタコン」という言葉の生まれたきっかけはロリコンの対義語として、というものでしたが、この特集で「ショタコン」の対象になった少年たちにさざげられていたのは恋愛とかさう言う感情ではなく、ペットに対する愛情みたいなものだったように筆者は思います。

そしてさう言う感情を抱いたのは女性だけではなかったのです。男性もさう言う感情を抱いていたようです。

『ふあんろーど』第六号(八一年七月二十五日発行)の八九ページで男の人の「ショタコン」感情と言つものもありだと言つたり取りが明記されておりますから。(傍注三)

中には「ショタコン」の対象に対して崇拜に近い感情を持つた人もいらつしやいました。たとえば『海のトリトン』のトリトンに対して捧げられた感情は特別に「トリコン」と呼ばれて別物とされておりましたとか。(傍注四)思春期以降の男のおいがしない男の子、それがこの当時考えられていた「ショタコン」というものだったよう「ごいませんが。

言葉を受け止める側にはいろいろな考え方を持った人々がいます。そのいろいろな考え方が人それぞれ「ショタコン」と言うイメージをつくりだしたようです。

唐沢俊一さんの著作『トンデモ美少年の世界』(光文社

文庫・九七年一〇月二〇日初版)によりますと、当時は「ふあんろーど」で提示された語源以外にもいろいろと語源がさざやかかれていた(傍注五)とのこと。

「ショタコン」という言葉への思い入れが語源と言う形になつてあふれてしまつたのでしよう。

前の段落で少し触れましたが、「ショタコン」を象徴するものとして半ズボンがありました。そこから両極端な連想が生まれたようです。

これは筆者の想像ですが、少年と言う集団への憧憬をこめた連想から「少年たちコンプレックス」「少年探偵団コンプレックス」と言う語源説が生まれ、下半身に視点を置いた性的な連想から「少年ロリータコンプレックス」「少年耽美コンプレックス」と言う語源説が生まれたのではないでしようか。(傍注六)

このように推測を交えつつ資料を並べ検討してゆくと、「ショタコン」と言う言葉は発生したその瞬間からさまざまな嗜好を内包した言葉であつたように思われます。その内包されたものはあいまいなままで今日にいたり、そして整理されなまま拡散されているようにも思えるのです。

これは興味深いことではないでしようか。「ショタコン」自体があいまいだつたのではなく、「ショタコン」を育むゆりかごの方こそあいまいであつたと考えられると言つことなのです。

さて、「ショタコン」と言う言葉が生まれた頃を筆者の手元にある資料を元に再構成してみました。

これからしばらくこの題の元で連載していく中で、「ショタコン」というものがいかに育ち、一般世間とどうかかわつていったのかを筆者のできる限りゆるやかな形で編んでみたいと思つております。全四回予定であります。

よろしければお付き合ひ下さい。

傍注一

『国際おたく大学』収録
渡辺由美子・筆「シヨタの研究」三二ページ脚注参照
(岡田斗司夫編 光文社・九八年七月三〇日初版)

傍注二

「太陽の使者 鉄人28号」
一九八〇〜一九八一 よみうりテレビ系列にて放送

傍注三

ネタと採るべきか、画期的な回答と観るべきか。

傍注四

筆者が確認した最古の例は『ふぁんろーど』八二年一月号特集文中読者投稿によるもの(八ページおよび二六ページ)。唐沢俊一の著作中にもトリコンへの言及があるが、それはこの記事によるものか。

傍注五

「シヨタコン・アニメ史」一三七〜一四三ページ
初出：『小説イマージュクラブ』九六年七月号
(コアマガジン・九六年七月一日発行)

「唐沢俊一の美少年輪廻転生」七八〜八五ページ
初出と文庫本収録分は文体が違ふ【初出時は丁寧体であり、文庫収録の際に口語体から発展した唐沢文体に改められた模様】ので留意のこと。概要は同じ。

なお唐沢は語源として「正太郎コンプレックス」ではなく「正太郎くんコンプレックス」なる異型を挙げ、個人の裁量で文中で依拠する語源として採用している。唐沢は他にも一つ「金田正太郎コンプレックス」と言う異型を挙げ、他にも異型があると示唆している(が、唐沢の提示している異型二つの内使用が確認されているのは「正太郎くんコンプレックス」のみである。但し「正太郎くんコンプレックス」と言う表記として、ふぁんろーど特集内二五ページ画像キャプションに用いられている)。

はつきり紹介された語源説は「少年たちコンプレックス」と(藤子不二雄「オバケのQ太郎」由来の)「正太郎コンプレックス」。

後者の「正太郎くんコンプレックス」の流れの一部はWEBサイト「遊来星図書室」内「藤子シヨタ その2:新正太党宣言」(URL後述※)にて確認することが出来る。なお文中にシヨタコンに先駆けて用いられた言葉として「リボコン」「リトル・ボーイ・コンプレックス」というものがあるとの指摘があるが、こちらは「アニメージュ」五月号(徳間書店・八二年五月一日発行)一五二ページ掲載(アニメファンのビョーキスタイル研究)「ここまで来た『ロリコン』ブーム その前線を追う」(米沢嘉博・筆)の傍注欄にて、「リボコン」LITTLE BOY COMPLEX」と言うのもあつて、これは女の子がかわい

い少年を対象にしたもの」と言及されている。
※ http://www.ne.jp/asahi/meteor/jun/fs-fujiko_02.html

傍注六

「少年たちコンプレックス」は前述唐沢俊一の著書より。
「少年探偵団コンプレックス」は「ファンロード」八四年一月号(フボート・八四年一月一日発行)「シヨタコン特集」内にて確認。

「少年ロリータコンプレックス」「少年耽美コンプレックス」はそれぞれネット上より採録した。
実の所各語源説の初出については未だ確認が取れていない。

「少年探偵団コンプレックス」の初出については指摘した『ファンロード』誌自体が「某誌」と伏せる様な表現をし筆者も関連しそうな雑誌誌面確認作業を随時行なっているが未だ確認は取れず。伝聞の限りでは八四年五月十日に放送されたラジオ放送「谷山浩子のオールナイトニッポン」中において言及した投稿が寄せられたらしいとの事だが。※(参照URL後述)

なお、前出・唐沢俊一著作文中では「少年探偵団コンプレックス」の存在について一切触れられていない。唐沢当人が『筆者も以前、間違つて解説した事がある。「めん」で述べているのが興味深くはある。
「少年たちコンプレックス」については「アニメージュ」八月号(徳間書店・八三年八月一日発行)一〇六ページ掲載の読者投稿にて「少年コンプレックス」という類似表現に至ることが出来た。しかしそれ以上の進展は現時点では無し。
関係各誌を筆者が確認した限りでは、当時のシヨタコン観としておおむねファンロードで提唱されたもので合意が成立していた様である。
※参照 <http://yuki-tab.jp/ann/an840510.html>
「追補」少年ロリータコンプレックス」について。現時点で二〇〇三年八月にはネット上で提唱されていた事が確認できている。参考の為WEBアーカイヴ経由URLを提示する。
<http://web.archive.org/web/20030805134719/http://www.hcn.zaq.ne.jp/cabic508/2otakai15-2.html>

※傍注六補足
「ミックマーケット二代目代表・米沢嘉博は往時を回想して」
『私をミケにつれてって！』別冊宝島三五八
宝島社・九八年一月十六日初版

掲載の一文・マンガと同人誌のささやかな饗宴「コミケットの与えた影響」(四〇〜四九ページ)中の小項目【やおいの形成と進撃!!】冒頭で
《女の子たちがシヨタコン(「鉄人28号」の正太郎コンプレックス)を言い出したのは八三年頃で、折原みなど可愛い絵で少年を描く描き手たちが出、一方ではまのとのまなどによってアダルトコンプレックス(アダコン)と呼ばれるおじさまネタのホモパロディが登場。一般化したのはアニメ「キャプテン翼」をネタに、やおいと呼ば

れる少年同士の愛を描くホモニア・パロが人気を得た八五年頃のことである。【四七ページ】

と言及している。

★ 参考資料

『JUNE』一九九三年十一月号

マガジン・マガジン 九三年十一月一日発行

【同人誌&コミケ◆ヒストリー座談会】

米沢嘉博(コミックマーケット代表(当時))

境京子(ニミック・レポリューション代表(当時))

竹田やよい(漫画家。現在「篠田夏姫」と改名)

◆なお、傍注六の内容確認の為、対応時期に発行された以下の雑誌類を参照した。

(二〇〇九年十二月現在・順不同)

* * * * *

アニメージュ(徳間書店)

アニメディア(学習研究社)

JUNE(サン出版)

花とゆめ(白泉社)

ジ・アニメ(近代映画社)

マイアニメ(秋田書店)

COMIC BOX Jr.(ふゅーじょんぷろだくと)

OUT(みのり書房)

アニメック(ラポート)

COMIC BOX(ふゅーじょんぷろだくと)

FUSION PRODUCE(ラポート)

テレビランド(徳間書店)

テレビマガジン(講談社)

ぱふ(雑草社)

* * * * *

これ等の資料のおよそ九割は二〇〇九年十二月二八日閉館となった大阪国際児童文学館で閲覧したものである。この一文をもって深く感謝したい。

シヨタコンのゆりかご2シヨタ表現の発育
ふゅーじょんぷろだくと刊

(二〇〇七年二月十二日初出)

第一回目ではシヨタコンと言葉が生まれた瞬間と、シヨタコンと言葉をめぐり様々な思いが行き交ったということをお話しました。

そこまです踏まえて今回はシヨタコンという言葉の発育過程を見て行きたいと思います。筆者の守備範囲が商業出版物寄りですので視点のかたよりがあることをお許し下さい。

八〇年代前半、シヨタコンという言葉は生みの親によって意味合いに大きな幅を持つように育てられました。

八一年五月に『ふあんろーど』誌上で初めて登場したその後八二年一月号および八四年一月号誌上にて「シヨタコン特集」が組まれましたが、その一連の内容はアニメ・漫画のキャラクターから洋画の子役までを含む少年全般に対する愛着にあふれたものでした。

資料から見ると限りでは「シヨタコン」と言う言葉の下に二次元への愛着も三次元への愛着もまとめられていた、と言う感じでございますでしょうか。

そして、この後シヨタコンという言葉の流れはふつと途切れていたかのように見えます。少なくとも八〇年代終盤頃まで。ただしこれはあくまでも筆者がみてきた商業出版と言われの中の話であって、この期間に同人誌界隈でどういふ動きがあったかとかうかがい知ることが出来る資料をあいにくと筆者は知らないのです。そこで改めて商業出版の世界をみますと、八〇年代後半にひとつの動きがありました。同人誌アンソロジーの誕生です。

八〇年代中盤に同人誌の世界で「キャプテン翼」のやおい二次創作を中心とした流れがありました。それを背景として八七年一月二四日、日本初の商業同人誌ア

ンソロジー『つばさ百貨店』(別冊COMIC BOX 1:ふゅーじょんぷろだくと刊)が誕生しました。

この同人誌アンソロジーと言っ出版形態は二次創作ジャンル内の同人誌の中から版元が作品を選抜し、一冊の本にまとめて商業流通に乗せたものでございます。ここでシヨタコンの要素を含むジャンルと言っ事で焦点を絞り、改めて同人誌アンソロジーの中での流れを検証してみます。

「キャプテン翼」と「聖闘士星矢」の流れが前後して発生し、それを追いかける様にして「鎧伝サムライトルーパー」の流れが発生します。この三ジャンルに関して私見を言えば、キャラクターの年齢的に見ればシヨタコンと認識できなくは無い、と言っ範囲のものであります。「キャプテン翼」に関して言えば先のふあんろーどの特集二回ともにシヨタコン要素ありと認識されておりましてが。

対して星矢やトルーパーは少年よりもやや青年よりの世界と言っ認識が強かったように記憶しております。それと前後するように「魔神英雄伝ワタル」「魔動王グランゾート」(傍注二)の流れが発生しました。

恐らく明確にシヨタコンを意識した流れはこの二ジャンルから始まったのではないのでしょうか。主人公が少年であるという前提でさまざまな同人設定が試みられていた感がございます。

同時期にシヨタコン要素が前に出ていた作品:ジャンルといえば「ミスター味っ子」でございますが、ジャンル単独アンソロジー発行は確認する限り無かったようです。複数ジャンル相乗りのアンソロジーには再録されております(傍注二)。ジャンルとしての規模が小さかったかと問われると、そうでもなかったような感があるのですが。

閑話休題。同人誌アンソロジーの流れが出来てしばらく後、一つのテーマの下に描き下ろされたオリジナル作品群を雑誌形態ではなく書籍形態で商業流通に載せた出版形態、オリジナルアンソロジーと言っ流れも派生しました。

この流れからシヨタコンアンソロジーも後日派生したの
です。

「こまでの状況を背景として、九四年一〇月十五日、
一冊の特集アンソロジーが世に出ました。」

青磁ピブロス発行『b-boy 17 特集 シヨタコン』
シヨタコンを前面に押し出した雑誌あるいはアンソロジ
ーの最初の一步です。

ただ、「この特集号に掲載された読者からの便りにいわ
く。

『シヨタコンとは何ですか?』

【一六六ページ掲載読者投稿要旨】

この一言から察しますに、その当時のシヨタコンに対す
る正確な認識はまだまだ一部の人の間のみ留まってい
た感もあります。

その頃『現代用語の基礎知識』では『シヨタコン』とはな
んぞやと軽く説明されていました。独立用語ではなく、
『やおい』の解説の一部としてですが、

九一年版において初めて記述された時には、

「ロリコンに対抗する少女たちの『少年趣味』をシヨタ
コン(正太郎コンプレックス)と、かつて呼んでいたが、」

【二二二二ページ】

と、記されておりです。

翌年発行の九二年版では、

「ロリコンに対抗して少女たちが『少年趣味』をシヨタ
コン(正太郎コンプレックス)と一九八〇年代初頭呼ん
でいたが、」【二二三八ページ】

と変化し、続く九三年版では、

「ロリコンに対抗して『少年趣味』をシヨタコン(正太郎
コンプレックス)と八〇年代初め女の子たちは呼んでい
たが、」【一〇九四ページ】

と微妙に文脈が具体的になりつつ語源などには触れら
れず、と「言う感」で変化して行きました。

そして、九四年版では、

「一九八〇年代初め、ロリコンブームに対抗して半ズ
ボンの『少年趣味』をシヨタコン(正太郎コンプレックス)

と少女たちは呼んでいたが、」【二一〇六ページ】
とかなり具体的な要素を提示した解説がなされるよ
うになりました。

これらの記述を含む「マンガ文化用語」の解説を担当
したのは当時のコミックマーケット代表であり同人誌
研究の大家でもあった故・米沢嘉博さんでありまし
た。

この一連の記述が当時のシヨタコンと言う言葉の状況
を示すものではなかったか、と筆者は感じます。

さて、青磁ピブロスからシヨタコン特集が刊行された翌
年の九五年四月二五日、エイコー出版より『シヨタコン
ONLINEアンソロジー』と銘打たれた『TIP TAP』が
創刊されました。

あえなく三号で休刊になってしまったものの、シヨタコ
ンを主題にしたシリーズアンソロジーが発行されたの
は『TIP TAP』が初めてだったのです。「このアンソロ
ジーの存在がなければ今に至るシヨタコン商業誌アン
ソロジーの流れが存在しえなかったかとは想像できませ
ん。

版元が同人誌印刷所・曳航社の系列会社であったがゆ
えに当時二次創作を行っていた作家さんたちへのつな
がりや確保された環境が幸いしたのではないかと、と
うかがえます。

『TIP TAP』は雑誌の性格を持ったアンソロジーとし
て企画されていたようです。読み切り作品中心ではな
く、連載を意図した作品が数作収録され、また読者
投稿募集告知や新人投稿募集告知もされていた本で
した。第三巻以降そのまま継続していれば募集された
投稿による読者コーナーのページも存在していたのか
もしれません。

この本が非常に前向きな姿勢で発行されていたらしい
ことがこれらの点からうかがえます。

そして、これ以降シヨタコンの流れは九〇年代半ばか
らじわじわと展開してゆくこととなります。次回は、
『TIP TAP』以後のシヨタコンの流れをみることで現

在に続く流れの一端をみてみたいと思っております。
よろしければお付き合い下さい。

* * * * *

傍注一

参考資料として筆者調べジャンル単独アンソロジー冊
数調査結果のまとめ頁URLを提示します。

<http://xqo.atinfoseek.co.jp/menu/data/auth.htm>

※この冊子には附表として別添致しました。

ワタル及びグランゾートはジャンル単独ではアンソジ
ーの冊数が少なかったと記憶しております。

尚現在、ジャンル単独アンソロジー冊数はのべ二三〇〇
点余りかと思われれます。

傍注二

参考資料として筆者調べ複数ジャンル相乗りアンソロ
ジー冊数調査結果のまとめ頁URLを提示します。

<http://xqo.atinfoseek.co.jp/menu/data/some.htm>

※この冊子には附表として別添致しました。

ワタル及びグランゾートを同一線上に存在する作品
として見る という流れが当時ありました。

尚現在、複数ジャンルアンソロジー冊数は二二点かと
思われれます。

参考文献

『ふあんろーど』一月号

(ラポート・八二年一月二五日発行)

『ファンロード』一月号

(ラポート・八四年一月一日発行)

『つばき百貨店』別冊COMI-CBOX 1

(ふゅーじょんぷろだくと・八七年一月二四日初版)

『現代用語の基礎知識1991』

(自由国民社・九一年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識1992』

(自由国民社・九二年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識1993』

(自由国民社・九三年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識1994』

(自由国民社・九四年一月一日初版)

『boy 17 特集 ショタコン』

(青磁ビブロス・九四年一〇月十五日初版)

『TIP TAP』3

(エイコー出版・九五年四月二五日〜九六年三月三十日)

「ショタコンのゆりかご」³

「ショタ作品世界の揺らぎと変転」
「ショタゆりかご」

(二〇〇七年六月二四日初出)

第一回目ではショタコンと言う言葉の誕生とそれをめぐる人々の思いを、第二回目ではショタコンと言う言葉・それをめぐる状況の発育についてお話ししてみました。

今回は、そこまでを踏まえ九〇年代中盤から終盤にかけて起こったショタコンをめぐる出版・状況の流れを再確認します。なお、筆者の守備範囲が商業出版寄りであるため視点のかたよりが生じる事をお許し下さい。

今回の内容は一九九五年辺りから一九九九年辺りまでに起こった事情についてでありませんが、時系列順ではなく、事象順に進行してまいります。そのため単元ごとに年代が多少前後することがございます。あらかじめご了承下さい。

まずはショタコン商業出版をアンソロジー中心でながめてまいります。

九四年に『ショタコンONLYアンソロジー』『TIP TAP』(エイコー出版)が創刊され、以降『ショタコンONLYアンソロジー』『テイポイ』(竹書房・九五年十二月二四日創刊)、『WE ARE SHOOTAROCOMPLEX!!』『ROOMEO』(一水社・九六年五月二〇日創刊)、『ショタコンONLY』『COMIC厨子王』(松文館・九七年三月二五日創刊)が登場します。

キャッチコピーにショタコンと冠さないものもいくつかございました。一例をあげれば『男の子による男の子のための男の子本』『U.C. BOYS』(茜新社・九五年十二月三〇日創刊)でございますとか。

アンソロジーのキャッチコピーをみますと、『ショタコン』と言う言葉が嗜好を分類するための言葉から創作分野の一名称として変化して行った過程が垣間見えるよ

うな気がします。定着するまでにそれぞれ試行錯誤があつた様でございますね。ちなみに、この頃以前も、またこの頃以降も商業出版における二次創作アンソロジーでは、ジャンルの名は冠されても『ショタコン』とは冠されておりません。これら一群の中でも九六年五月二〇日に創刊された『ROOMEO』は、時にショタコンアンソロジーの代名詞としてあげられることがございます。約三年半の間に通巻二一巻を発行した継続力がゆえにそう呼ばれるのやも知れません。また、『ROOMEO』には読者投稿コーナーが常設されており、そこから活気がうまれてくることもあつたのではないかと思われます。その後、ショタ漫画雑誌として『微熱少年』『少年天使』『半熱天使』(いずれも一水社)が刊行され、そして小説雑誌として『小説少年天使』(一水社。後に光彩書房)が刊行されました。雑誌と言う形態で刊行されたのは以降の歴史を振り

返りましてこの一群程度でしょう。後に『少年天使』『半熱天使』の読者コーナーからは一冊の本が派生しました。『天使のお茶会』(九八年八月十五日初版:光彩書房)と名付けられたその本は読者一般から選ばれた人気投稿者による描き下ろし作品他を集めたもので、その当時の空気を今に伝えていきます。

ここで一度立ち止まって、筆者の手元の一冊の同人誌をみることにいたします。

『THE SYOTAROH』と題されたA5版二二八ページからなるこの同人誌は、九六年八月三日に漫画家・まんだ林檎女史を発行責任者として世に送り出されました。

この本は「ショタコンとは何か」と往時活動していた創作者及び愛好者達が自問自答した思いを詰め込んだ考察集である、と筆者は捉えております。私情を交えて申し上げて良いのならば、ショタコンを考えるための基礎文献の一冊であるとも。この本には「ショタコン」と言うテーマの下、男性も女性も参加しております。が、男女比が同等と言う訳ではございません。

この本の内容：アンケート：シヨタコン像についての質疑応答・既存小説の読み解き、そして創作から浮かび上がってくるのは、シヨタコンから理想を見出す女性側の視点、そしてシヨタコンに（主に性的な）心の隙間を求める男性側の視点、と言う感じの差異である、と筆者は読み取りました。性差を無視して考えた場合、虚構として客観視出来るかどうか、と言う形に言い換えることも出来るかも知れません。それは性を挟んだ関わり方また性の描写傾向の違いにも影を落としていたのではないかと思われまます。

この本で示された「揺らぎ」がもう少し大きくとらえられていたならばシヨタコンを取り巻く状況はまた変わっていたのかも知れません。

『THE SYOTAROH』より象徴的な一文節を。
『そりやエロマンガは売れるだろう！』しかし、それはシヨタ物の一番卑しい醍醐味なのだ！勘違いされては困る。シヨタコンはもつとメーテルを見習え！そしてオーギュを恥と知るのだ！少年を見たら暖かい目で見守るのだ。』【二〇二ページ掲載『まん談』より】（傍注一）が、時代は上記の文節とはいささか違う方向に流れて行こうとしたようです。

司書房から刊行されたオリジナルシリーズアンソロジー『SHOTA・COMBOOMIC ANTHOLOGY!!』『Pet・BOOY's』（九七年一〇月二五日創刊）は、一つの大きな波であったと認識できるのではないだろうか。当初から性描写の過激さを売りにし、成人向けの年齢指定作品集であると暗に示していた（傍注二）このアンソロジーは、耳目を集めることとなりました。それに呼応して投稿者も集まり、投稿作品も増えていったようです。

投稿者と掲載作家陣が描く性描写の相乗効果で更に耳目は集まったことでしょう。しかし、ここで一つ、世間から影がさすという事態が起りました。九九年に成立した児童ポルノ法（傍注三）と言ういまだ正体が

今ひとつはつきりとしめない幽霊が、その影です。現に『Pet・BOOY's』もこの幽霊に脅かされ、一時表現の自主規制を行っていた節があります。九八年一〇月発行の第七巻においてその傾向は顕著でした。性描写がキヌや愛撫の暗示程度でおさえられていた作品が大半を占めていたのです。

読者としての筆者の主観であえて言えば作品の質はそれでも充分保たれていたはずですが、エロとしては物足りない出来になってしまっていました。読者からはエロを求められつつ、しかし規制からの束縛は受けたくないという迷いが、恐らく『Pet・BOOY's』の中にもあったものと思われまます。

『Pet・BOOY's』はその後ある程度自主規制を解禁しつつ継続しましたが、九九年四月に発行された第一〇巻をもって幕を閉じました。それと前後するように当時発行されていたアンソロジーは次々と幕を閉じてゆきました。前述の『ROMEO』もまた同年九月に幕を閉じ、九九年が終わりを迎える頃にはほとんどの商業シヨタアンソロジーが幕を閉じていったのです。

さて、ここで時代の傍証として、一つの雑誌記事を参照にしたいと思います。

「シヨタコン・ワールド」に溺れる男たち（『週刊SPA』九八年二月十八日号掲載・扶桑社・四六〜五一ページ）がそれです。

この記事はその当時増加していたシヨタコン男性のことを分析しようとする六ページにわたる記事の中であおりをいれず、同人誌及び商業出版誌のデータを集めかなり誠実に状況を読み物として再構成したものでした。

その記事中で同人作家・フリーライター・イラストレーターと言う顔ぶれの愛好者三人による覆面座談会が催されており、そこでは心理面描写の不足、ことに男性作家によるドラマ描写の薄さが指摘されています。そして、シヨタとは「男のコの気持ちを描けるファンタジー」ではないかと言う指摘もまたなされています。

た。

これらの言葉は形こそ変わっていますが、前出の『THE SYOTAROH』において提示されていた違和感と似通ったものではないでしょうか。

これらの弱い部分があったからこそ、シヨタコン関連の商業出版は九九年末に潮が退くように消えて行ったのではないかと筆者は思うのです。

さて、締めくくりにシヨタコン同人誌即売会の流れについてデータ提示を簡単に。

九五年五月五日、シヨタオンリーイベント『シヨタケット』の第一回が開催されました。以降このイベントは今日に至るまでほぼ毎年五月五日に継続開催されています。日付については主催が語った言葉が記録として残っております（傍注四）が、初回の日付に関して言えばまったく偶発的なものであったとの事です。以下箇条書き風にして後続イベント開催時期を表記いたしますと、

・『00.5.5.少年系!!』

@東京 二〇〇〇年五月五日

（二）シヨタケット『非開催年に開催されたのみ』

・『しよたやねん』

@大阪 二〇〇一年以降継続開催

初回のみ三月三日

三月第二土曜日（二〇〇二年以降以降）

・『シヨタコレクション』

@東京 二〇〇一〜二〇〇五年

一〇月（二〇〇三年のみ十一月）

と、なります。九五年以降の五年間においては『シヨタケット』が実質唯一のシヨタオンリーイベントでありました。そのため、シヨタイイベント『シヨタケット』と認識される意識は今も大きいのかも知れませぬ。（傍注

五)

商業出版におけるシヨタコンの空白期間と認識されるのは九九年末よりおおよそ二年間。もともと、まったくの空白であったというわけではありません。とりあえず発表の場はありました。

コアマガジンから発行されていた美少女漫画雑誌『ばんがいち』(月刊・B5版)誌上において九五年一月頃より存在したと伝え聞く投稿コーナー・通称「吉田部屋」もその一つです。見開き二ページで構成され、投稿イラストの主題がシヨタ・少年に特化されたこのコーナーに投稿者は集い、この空白期間においても淡々と投稿を続けて行きました。(傍注六)

さて、世紀が変わり二〇〇二年十一月十五日、松文館より創刊された『シヨタコミ』を皮切りにしてシヨタコン商業出版は再び動き出す事になります。今回はとりあえずここまでにしたいと思います。

『シヨタコミ』から現在に至るまでの話は、次回の連載最終回においてお話ししたいと思います。

* * * * *

傍注一

メーテルは漫画『銀河鉄道999』(松本零士作)の登場人物。主人公鉄郎の憧れの女性でありなおかつ保護者の存在。オーギュは漫画『風と木の詩』(竹宮恵子作)の登場人物、オーギュスト・ポウのこと。主人公ジゼルベル・コクトーの実父であり愛人の一人でもある。

傍注二

司書房が成人向けコミックを主に扱う版元であったためか錯覚されるのだが『Pet BOY's』自体には成人向けコミックであることを示すマークは記されていない。しかし、書店での扱いは成人向けコミックの扱いに準じ

たものであったと筆者は記憶している。

傍注三

正式名称「児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律」平成十一年五月二十六日法律第五十二号)。当時は本成立前の様々に取り沙汰されていた時期であった。

傍注四

『Pet BOY's vol.5』(九八年六月二五月初版・司書房)掲載シヨタケット主催談話(七八ページ)参照。

傍注五

筆者主観による認識。実際には「シヨタランド」(九六〇九八年)及び「半ズボン同盟」(九八〇九九年)が存在した。

※参考URL <http://www3to/0055>

『00.5.5 少年系!!』公式サイト

傍注六

初出時は「九十六年四月頃より存在」と記述。

(紺田翔太さん経由で発祥時点の指摘を戴きました。傍注中ながら御礼申し上げます)

往時のコーナー名は「SEXY D. のヒミツのお部屋」。のち「セクシー・ダイナマイト吉田の秘密のお部屋」。二〇〇七年五月段階では「シヨタ、ゲイ、ジヨソコは酔を飲まない!」となっている。

参考文献(本文にないもの)

「シヨタコンの研究」渡辺由美子

『国際おたく大学』所収(岡田斗司夫編・九八年七月三〇日初版・光文社)

※二〇〇九年八月十七日追記。

『THE SYOTAROH』の存在はその後、

『私を「ミケ」につれてって!』別冊宝島三五八

宝島社・九八年一月十六日初版

一五二ページにて「学術書としても最適な一冊」と言及される。編集部との認識としては創作同人誌であった模様。

※二〇〇九年九月二一日追記

本編3及び本編4の時代背景及び関係者の心理状態を描写した論としては

『エロマンガスタディーズ』

『快樂装置』としての漫画入門』

永山薫著・イーストプレス

二〇〇六年十一月三月初版

の二三八ページから二四四ページにかけて展開されている一節「シヨタ、またはオートエロティシズム」を挙げる事が出来るだろう。シヨタと言う感覚の「揺らぎ」についても有効な解答であると考えられる。

シヨタコンのゆりか「4」ゆりか「は方舟に」

☆つづり・くす」

(二〇〇七年九月十六日初出)

第一回目ではシヨタコンと言う言葉の誕生とそれをめぐる人々の思いを、第二回目ではシヨタコンと言う言葉・それをめぐる状況の発育についてお話ししてまいりました。

そして、第三回目では九〇年代中盤から終盤にかけて起こったシヨタコンをめぐる出版・状況の流れを再確認いたしました。

今回は、二〇〇二年以降から現在に至るシヨタ表現をめぐる状況・流れを確認し、シヨタ表現の将来への展望に代えてみたいと考えております。

なお、筆者の守備範囲が商業出版寄りであり、筆者個人の嗜好による認識も多少入りますため視点のあたりや同人誌分野からのへだたりが生じる事をお許しください。また今回も時系列順ではなく事象順に進行する心積もりしております。内容によっては時間軸が前後するであろう事もお許しください。

シヨタ表現の商業出版における流れが再び動き出したのは、二〇〇二年十一月十五日、松文館より創刊されたアンソロジー『シヨタコミ』がきっかけでありました。申し添えておくならば『シヨタコミ』には「成年コミック」マーク(傍注一)は付されておりません。

次いでしばしの時をおいて茜新社より『好色少年のススメ』が「成年コミック」マークを付され二〇〇三年一月十日に創刊、ついで『シヨタコミ』の発展形として松文館より『少年愛の美学』シリーズが同じく「成年コミック」マークを付されて同年六月十五日に創刊されました。

そして遅れること四ヶ月、同年十月二十七日には桜桃書房より『少年嗜好』が創刊されました。

この中でひとまず着目すべきは『シヨタコミ』から『少年愛の美学』への流れを導いた松文館の版元としての姿

勢でありましょつ。

『シヨタコミ』創刊号に記された編集部からの一言にはこう明言されております。「シヨタコミック誌の再興を目指し立ち上がった『シヨタコミ』」と。

また、『少年愛の美学』創刊号においても「シヨタコミック誌の再興を目指し立ち上がった『シヨタコミ』が形を変えて、『少年愛の美学』と『妄想少年』の2誌になりました」と明言されております。

ただし、表現の形を守るためのゆらぎの現われか、両誌とも以下の一言がそえられていることを記憶しておくべきでしょう。「この本の登場人物はすべて18歳以上です」。

この流れにおける松文館の功績はもうひとつあります。それはアンソロジーと平行して単行本刊行にも積極的であったということです。

シヨタ商業出版の流れにおいて、「成年コミック」マークの有無に左右されないシヨタ漫画専用単行本シリーズを最初に作ったのは松文館であります。「シヨタコミ」の「lector」がそれですね(傍注二)。それ以前にもシヨタ漫画あるいは小説が単行本化されていた例は他の版元でも多々ございますが(傍注三)、広い範囲をカバーすることが可能な専用シリーズが作られるまでに至ったと言う例は残念ながらございません。他社のシヨタ漫画専用シリーズ(傍注四)は松文館のシリーズ設立以降に登場したと筆者は記憶しております。

閑話休題。シヨタ商業出版の新たな流れは「成年コミック」マークの付された『好色少年のススメ』『少年愛の美学』『少年嗜好』を中心として進行していきました。この新たな波の中では雑誌形態のものが登場することはありませんでした。アンソロジーの性格が雑誌めいたものであったにしても、出版形態はアンソロジーと銘打たれた単行本の形であり続けたのです。

表現内容の幅についても一言添えておくべきでしょう。シヨタと言う表現を「成人コミック」のひとつのあらわれととらえた結果、少年と異性の交わりを描く作品であっても少年を主軸とした物語展開であれば「シヨ

タ」と認識されるようになり、そういう観点から編まれたアンソロジーあるいは単行本もこの流れの中で出るようになりました。煩雑になりますので具体例を挙げるのは避けます。

またその一方で「成年コミック」マークの付されないアンソロジーも多く刊行されておりました。それらの多くは耽美を源流とするボーイズラブからの分岐と言えるものでございます。笠倉出版社より九八年一月から二〇〇五年五月にかけ刊行された「x kids」(バイキッズ)をはじめとする四シリーズのアンソロジー(傍注五)はその典型でありましょつ。

では、これらの拡がりの背景をしばしばかえりみます。世間の認識のサンプルとして、『現代用語の基礎知識』(自由国民社刊)一九九七年版から二〇〇〇年版にかけ、セックスに関する若者用語として説かれたシヨタコンの説明を提示しましょつ。

九七年版では「少年にしか興味を示さない女性。また、そのような趣味」(八二二ページ)と説かれていたものが翌九八年版では「少年にしか興味を示さない人。そのような趣味」(一一八五ページ)となり、九九年版になりますと「少年にしか興味を示さない人。そのような趣味。漫画の正太郎からという説があるが、それ以前からあり、正しくはショートアイズ・コンプレックスから。両目の間が近い子どもを指す俗語」(一〇七八ページ)と記述されます。二〇〇〇年版では「少年にしか興味を示さない人。そのような趣味。ショートアイズ・コンプレックスから。両目の間が近い子どもを指す俗語」(一〇六五ページ)と記されております。

これらの説明の正誤はひとまずおきまして、言葉に対する認識の一例としてこういうものがあつたと提示しておこうと思ひます。(傍注六)

また、筆者の体感といたしましてはインターネットを通じたシヨタコン感覚の広がりと言うものもあつたかと思われます。雑誌の投稿欄の代わりにインターネットが作用したと言う感じでございませぬ。この波は日

本国内にとどまらず世界にも広がり、シヨタII SHOTAとして拡散していきました。同人商業にかかわらず過去の作品が再評価され、それがその当時現在の評価に火をつける結果にもなった感を持ったことを記憶しております。

ここでひとつ着目すべきはSHOTAの定義でありますね。

日本における『シヨタ』はある意味非常に定義があいまいで、時には少年と交わる相手の性別属性を限定しないものでありましたが、SHOTAについては最初から少年同士ないし少年と男性と言うカップリングが想定されておりました。そのため、後年少年と女性が交わったSHOTAを表現する語としてstraight SHOTAと言う表現が生まれたほどです。

シヨタ表現を嗜好する層は意外な方面からも流れ込んでまいりました。成人を対象とした恋愛PCゲームの攻略対象として普通の少年ないし女装した少年を含むものが散見されるようになり、そこからシヨタ嗜好に転ずる層が出てきたのです。ふと気になって対戦格闘ゲームの世界をかえりみれば、格闘者の一人として少年が登場するという流れの末に、『GUILTY GEAR XX(ギルティギアグゼクス)』中においてブリジット(傍注七)と言う女装した少年が出現するようになつておりました。図らずもブリジットの登場は、女装少年を好ましく思う層の開拓に役立っただけで、と筆者はネット越しに伝え聞いております。

さて、ここで同人誌の方面に目を向けてみますと、イベントに新たな動きがあったりいたしました。

『BOYS☆コンプリート!』

@関西 二〇〇二年～二〇〇五年

初回 京都 十月十三日開催

第二回～第四回

大阪にて 九月中旬日曜開催

〈男のこ系同人誌即売会〉と冠したこのイベントの参入によって、関西関東ともにシヨタイイベントが年二回ずつ開催されるようになり、発表の場が増えることによつてサークルの創作意欲を向上させることに一役買ったのではないかと、思われまします。

二〇〇五年から二〇〇六年になると、また状況は変化します。

関東のイベント『シヨタコレクシオン』が二〇〇五年十月に五回目をもって終了。ならばに関西のイベント『BOYS☆コンプリート!』も、二〇〇五年九月に四回目をもちて終了しました。そして二〇〇六年になるとそれぞれに入れ替わるように関東では『少年系総合同人誌即売会 シヨタスクラッチ』が、関西では『関西シヨタオンラインイベント CUTE☆』がそれぞれ開催される運びとなり、発表の場が少なくなるといふ事態はなくなりました。又、両イベントとも年中複数回開催という新機軸(傍注八)を打ち出し、創作発表の場をさらに広げる一助となったのではないかと、思われまします。

二〇〇七年になるとさらに状況は変化します。関西のシヨタイイベント『しよたやねん』が三月に七回目をもちて終了し、関西におけるシヨタイイベントは現時点で『関西シヨタオンラインイベント CUTE☆』のみとなりました。

同人誌創作の場においても商業出版と歩を合わせるようにシヨタという言葉の解釈は広がってまいりました。このコラム中でここにさらに触れることはありませんでしたが、耽美にはじまりJUNEを経てボーイズラブにいたる流れの中からもシヨタに対するアプローチは少なからずございました。(傍注九)

読者の嗜好の拡がりは創作者の表現の拡がりにもじわじわと影響を与えたのでございましょう。

商業出版においても流れが少しずつ変わってまいりました。

二〇〇六年一月に『少年愛の美学』が十七巻をもってひとまず幕を引き(傍注一〇)、『好色少年のスズメ』も

二〇〇六年九月から続刊が出ない状況。(傍注十一) そう言う中で『少年嗜好』は主題・方向性を女装に徐々に変えつつも現在続刊中という感じです。『少年嗜好』には版元を替えつつも継続してきた(傍注十二)と言う強みもございませぬ。

また、『少年嗜好』の編集氏が携わっている司書房のアンソロジー『男の娘HEAVEN』も又女装少年を主題としたアンソロジーでございませぬ。(傍注十三)

これらの微妙な方向転換も流れを継続するための一つの選択でございませうか。

アンソロジーの流れが徐々に退いてゆく中単行本が合間を埋めるように刊行される流れもありますので、流れが完全に変わったり止まったりということではないということではないと思われまします。

読者の嗜好の拡散により、表現を提供する側も拡散を狙っていると好意的に解釈するべきなのかもしれません。

とりあえずここまでまとめてまいりましたが、資料と膝つき合わせてきた筆者にも正直なところ、シヨタ表現の明日がどういう方向に行くのか今のところまったく見えておりませぬ。

ブームとしてのシヨタがかけりを見ているのではないかと問われても素直に首を縦に振ることが出来ませんし、表現の一ジャンルとして定着したのだから、と問われてもどうなのだろうと首を傾けてしまします。

ただ、過去のブームと思われる流れと二〇〇二年以降現在に至る流れとでは同人誌の世界における裾野の広がりと言う点において違いはあるのでしょうか。その一点がどう作用するかによって将来の見え加減は変化するかと思われまします。

さて、都合四回にわたり、かなりの駆け足ではありま

すがシヨタコンの歴史、二五年間+αを振り返ってまいりました。お付き合いくださった皆様には深く感謝いたします。

ありがたいことにこの連載コラムは後日シヨタスクラッ

子の刊行物として一冊にまとまると言っていることでお話を載せております。
その折に、再びお目にかかれれば幸いです。

傍注一

出版倫理協議会によって九八年以降施行された『雑誌や出版物等に関する青少年関連施策』の一環。自主規制内容四項目のひとつであり、多く黄色地の楕円形に『成人向けコミック』とコミック体で標記される。

傍注二

『シヨタコミ』創刊以降に発足した。
シリーズの大部分は同社の持つボーイズラブ用レーベル『ダイヤモンドコミックス』内においてB6版へ成年コミックマーク付記無の扱いを受けているが一部例外がある。

成人コミック用レーベル「別冊エースファイブ(AV)コミックス」より刊行されたアンソロジー『少年愛の美学』掲載の作品をまとめた単行本については「ダイヤモンドコミックス」内の刊行とされ、版型はA5版である。
又、秋緒たかみ『ぼつきーず』のみについては「エースファイブコミックス」より刊行され、シリーズ内で唯一(成年コミックマーク付記の本となつている。版型はA5。

このゆらぎは「シヨタ」をボーイズラブの一種としてとらえるか成年コミックの一種としてとらえるかという認識の競合によって発生したものであろう。

※傍注二補足

松文館のボーイズラブ・シヨタ作品レーベルの推移を以下関連分のみ参考」に略記する。

★ 別冊エースファイブコミックス・成年コミックマーク付記

無

当初A5版のみ。後にB6版のものも刊行され、徐々にそちらが主流となる。ボーイズラブとシヨタの区分刊行無。

← 「マークとして」SBKC(松文館コミックス)が登場。しかしレーベル名は変わらず「別冊エースファイブコミックス」。ボーイズラブとシヨタの区分刊行無。

← ボーイズラブ専用レーベルとして「ダイヤモンドコミックス」成立。一次創作は元より二次創作アンソロジーもこのレーベルの下刊行される。この時点でもまだシヨタとボーイズラブの区分刊行無。以下現在に至る。

傍注三

たとえば光彩書房や一水社もシヨタ作品の単行本を刊行していたが、シヨタ作品用のシリーズを発足させるまでには至っていない。

傍注四

モエールパブリッシング(『少年嗜好』系列)
↓「少年くさぶ」

★ 『ミルクキッズ』を除き(成年コミックマーク付)。

★ 司書房(『ラブした』男娘の子LOVE) ↓「Lovely Boys Co-lection」

★ ※(成年コミックマーク付)

★ オークラ出版(アクアコミックス)

↓「ふちBoys」

※掲載誌などによる明確な区分無し。前面に押し出されたシリーズではなく、シヨタ作品である事への目安的なものかと思われる。
←(成年コミックマーク付記されず)。

傍注五

このアンソロジーシリーズは、出版社側でシヨタをボーイズラブの一種と見做す認識がされているためか、成年コミックという扱いにはなっていない。

このアンソロジーの流れより「kids Section」と称したレーベルが創設され今も存在はするが、それはボーイズラブの流れの中における「少年」をメインにした作品を集めたもの。松文館他の形成するシヨタの流れとはいささか毛色を異とする。

傍注六

本文では当時(二〇〇七年七月末時点)のカタログ編集方針を鑑みて正否を明言しない曖昧な方向性を提示している。

これ等の用例はそもそも『現代用語の基礎知識』の中に於いても矛盾した存在であったと思われる。これ等の用例が提示されるのと並行して米沢嘉博によるマンガ用語解説中「やおい」項の補足説明(本編3で引用した九一、九四年版記述を踏襲した『正太郎コンプレックス』を語源とするもの)もまた継続して提示されていた。以下抜粋する。

★ 《一九八〇年代初め、ロリコンブームに対抗して始められた半ズボンの「少年趣味」シヨタコン(正太郎コンプレックス)》【九七年版・八六四ページ】

★ 《一九八〇年代初頭、ロリコンに対して始められた「少年趣味」シヨタコン(正太郎コンプレックス)》【九八年版・一一七七ページ】

★ 《一九八〇年代初頭、ロリコンに対抗して始められた「少年趣味」シヨタコン(正太郎コンプレックス)》【九九年版・一一二八ページ】

★ 《一九八〇年代初頭、ロリコンに対抗して始まった「少年趣味」シヨタコン(正太郎コンプレックス)》

【二〇〇〇年版・一〇一ページ】

★ 更に言及すれば『現代用語の基礎知識』九七年版には風俗・流行ワードウオッチングと言う流れの中で項目担当者の稲垣吉彦(文教大学教授・当時)がシヨタコンについて、

「若い少年を「可愛い、カッコいい」と好む女性たちの性向。ロリコン(ロリータコンプレックス)の男女の立場の逆転。「シヨタ」とは漫画「鉄人28号」でリモコンを操っていた少年正太郎で、小学生から中学生のこの年頃を代表するキャラクター。正太郎を知っているのは三十代くらいから。漫画同人誌販売会に集う女性の間にはわれはじめたことばだという。」(八三三ページ)

と解説している。この記述は後年稲垣が自著として刊行した『平成・新語×流行語小事典』(講談社現代新書・九九年四月二十日初版)にもそのまま再録されている。(二〇九ページ『平成8年』項)

この項目記述を否定する形で九八年以降の記述が成立したとしても、では九一年から掲載されている米沢の提示した定義とはどう折り合いをつけるのかと言う疑問が残る。

この当時『若者用語』解説を担当していたのは明治大学教授・堀内克明であるがこの変遷過程と彼が編集執筆に携わった英語関連の辞典内の記述を照合してみると実に興味深い結果が得られるだろう。

★ 『最新英語情報辞典』(小学館・八三年一月一〇日初版)堀内克明・高田清純・フレックスナー、S. B. 編
一一三六ページ【short eyes】項

★ 『米俗』子供に対する性犯罪者→刑務所内での俗語
『プログレッシブ英語逆引き辞典』

(小学館・九九年七月一日初版)國廣哲彌・堀内克明編
四三四ページ【eye】項→【short eye】
★ 『米俗』子供に対する性犯罪者」

また、他の辞典も参照文献として提示する。こちらとの比較もまた興味深い。

★ 『三省堂 ニューズ英語辞典』
(三省堂・八六年九月一日初版)磯部薫編
七三三ページ【short】項内活用一覧【short eye
s】

★ 『米俗』子供に性的ないたずらをする人
『米英タブー表現辞典』
(大修館書店・八七年五月二〇日初版)
本名信行・鈴木紀之訳
二八五ページ【SHUT EYES】解説文参照

★ 『アメリカでは、子供に性的ないたずらをする者を遠回しにSHORT EYES(小さい目つむり人)と呼ぶ。』
★ なお、これ等の記述に先立って一九七五年にはアメリカ力においてピエイロ作の戯曲『ショート・アイズ』が発表されている。この戯曲は七七年にはアメリカで映画化され、本邦では八一年に文学座によって初演されている。内容は後述URLを参照されたし。タイトルの意は『最新英語情報辞典』が指し示す通りである。

★ 『最新英語情報辞典』が指し示す通りである。これ等辞典類の記述から『現代用語の基礎知識』に於ける記述を導き出す事が出来るかどうかは、…もう申し上げずとも良いと筆者は感じる。補足として申し上げれば『現代用語の基礎知識』に於いて「ショートアイズ」或いは「ショートアイズ・コンプレックス」なるカタカナ語(外来語)が解説された事は一度として無い。

★ さて、『現代用語の基礎知識』【シヨタコン】項の記述はその後どうなったか。結果として米沢嘉博の書いた【やおい】項補助説明の一節のみ記述として残り、二〇〇二年米沢がマンガ用語解説担当者の座を退くまで変わらなず、二〇〇三年以降はマンガ文化用語担当者他誰人の手によっても該当する記述は為されていない。

(二〇〇三年版担当: 鶴岡法斎、二〇〇四年版以降

二〇〇九年現在まで担当: 秋田孝宏)
参考までに米沢による二〇〇一年と二〇〇二年の記述を抜粋する。

★ 『一九八〇年代初頭、ロリコンに對抗して始まった「半ズボン少年趣味」シヨタコン(正太郎コンプレックス)』
【二〇〇一年版・二六〇ページ】

★ 『一八〇年代初頭、ロリコンに對抗して始まった「少年趣味」シヨタコン(正太郎コンプレックス)』
【二〇〇二年版・一三〇五ページ: 年代表記ママ】

★ ※参照: 筆者記述ブログ記事
<http://xqpsy.seesaa.net/article/9415587.html>
<http://xqpsy.seesaa.net/article/30145296.html>

* 『ピエイロ紹介ページ』
<http://www.009net.com/to/info/pinero.html>

▼ 文学座上演記録【一九八〇年代】
http://www.bungakuzo.com/about_us/jyouten1980.html

※傍注六補足

★ なお、米沢がマンガ用語解説担当を退いた事に伴い『現代用語の基礎知識』から一時【やおい】他関連事項の解説が消えた時期がある。二〇〇三年版及び二〇〇四年版がそれに当たる。

★ その後二〇〇五年版マンガ文化用語欄に「ボーイズラブ」項が登場し、その内容を簡略化したものが二〇〇六年版以降巻末のカタカナ語外来語辞典に収録された。二〇〇六年版より現在までカタカナ語外来語辞典部分を担当しているのは二〇〇三年以降リセケネデー(リセケネ)辞書研究所教授に就任している堀内克明及び大森良子である。

★ 傍注七
『GUILTY GEAR XX』及び派生作#RELOAD・SLASHに登場する。修道女を連想させる衣装を身

にまとう。公式設定発表時まで性別が公表されず、そのため女性であるとうという一方的な認識を受け続けていた。

彼の公式設定自体が女装の理由説明にもなっている。

傍注八

『シヨタスクラッチ』は年間三回開催、『CUTE☆』は年間二回開催を謳い、実行している。

傍注九

前述(傍注五)の笠倉出版社による作品群刊行以前、耽美或いはJUNE側からシヨタコンと言う感覚についての言及は、本文でも述べた様に少なからずあった。

参考資料として一九九七年に刊行されたマガジンマガジン社発行のJUNELレーベルの雑誌二冊を挙げたがそれ以前にも一九八四年には『JUNE』(いわゆる『大JUNE』)B5版。サン出版刊行(誌上で二つの動きが確認されている)。

一つは一月号(通巻十四号)巻末の編集後記において編集部・尚(氏)が自らのアニメ鑑賞姿勢に対し、「シヨタコン」の言及。

また、三月号(通巻十五号)・読者イラスト投稿欄二七ページにおいてページの三分の一程度ながら「シヨタコン特集」が組まれている。

恐らくこの辺りでJUNEの概念の中にシヨタコンと言う感覚が取り込まれ、それまでであった少年愛感覚とは別に作用する様になったのではないかと考えられる。(些か強引な言い方をすれば本編3で言及した同人誌『THE SYOTAROH』を指してJUNEに取り込まれたシヨタコン感覚の再認の書と考える事も出来るだろう。それが更にJUNEに再吸収再構築されたものが参考文献の雑誌二冊であるとも強弁できる。)

また、他社刊行の小説誌においても言及はある。

本編1の傍注四でも提示した『小説イマージュクラブ』九六年七月号(コアマガジン・九六年七月一日発行)で『コラム』唐沢俊一の美少年輪廻転生(七八〜八五)

ページを含む特集『愛と怒涛の偏見情報・アニメバースヨーン』でシヨタ嗜好に照準を当てており、掲載作品にもシヨタ傾向が散見される。

因みに二見書房刊行『シャレード』九六年三月号【通巻十三号】及び九七年五月号【通巻二〇号】において男性作家・真道寺軍によるシヨタ小説が掲載されているが、彼は九七年五月号掲載のインタビュー(一七一ページ)文中において自分が影響を受けたのは「三四、五年の、男性向け美少女コミックにおけるシヨタブームで、少年×少年にすっぽりはまり込んでしまいました。」(引用部分ママ)と述べている。

傍注一〇

その後二〇〇八年六月に『少年愛の美学EX』として復刊。現在まで年間一冊ペースでありながら命運を保っている。

傍注十一

二〇〇八年六月に久々の続刊となる第十二巻が刊行され、それが最終号となった。

傍注十二

桜桃書房：『少年嗜好』1〜2

← オークス：『少年嗜好』3〜6

← シーズ情報出版：『真・少年嗜好』

← モエールパブリッシング：『極・少年嗜好』以下続刊

傍注十三

『ゆりか』暫定版刊行(二〇〇七年九月十六日)と前後して司書房が倒産し、事実上廃刊となる。二〇〇七年十二月よりメディアックスを版元として後継誌「えろ☆した」シリーズが刊行され継続中。又同人誌方面の後継誌として『男の娘HEL』が分岐して刊行さ

れた。

* * * *

参考文献

シヨタコン(1)

(二〇〇二年十一月十五日初版・松文館)

好色少年のススメ(1)

(二〇〇三年一月一日初版・茜新社)

少年愛の美学(1)

(二〇〇三年六月十五日初版・松文館)

少年嗜好(1)

(二〇〇三年一月二七日初版・桜桃書房)

シタTillicetti

(B6版・二〇〇六年四月五日初版・松文館)

X kids Voice

(九八年九月一日初版／笠倉出版社)

『現代用語の基礎知識1997』

(自由国民社・九七年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識1998』

(自由国民社・九八年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識1999』

(自由国民社・九九年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識2000』

(自由国民社・二〇〇〇年一月一日初版)

『現代用語の基礎知識2001』

(自由国民社・二〇〇一年一月一日初版)

※以降『現代用語の基礎知識2009』まで確認済み。

テディ・キャット

厳選パロディ同人誌再録アンソロジー

(ブリジットアンソロジー)

二〇〇三年十二月十七日初版・オークス)

* * * * *

参考資料

別冊JUNE 一九九七年七月号

『少年革命!?!』

(一九七七年七月一日発行 マガジン・マガジン)

小説JUNE十二月号

1997 12 NO.90

ぶちっ子特集

『ショウゲキ・ヨイ子・シアター』

(一九七七年十二月一日発行 マガジン・マガジン)

COVER 2『完全無敵!! 子供読本』

(一九七七年一月二十七日初版 オークラ出版)

小説GENKI-Boys Vol.3

『ショタコン特集』

(一九八八年三月一日初版・MOVIC)

『ショタコンのゆりかご』追補1

主体はどちらか〜男子ショタコンの居場所〜

ぶらぶら〜くす〜

さて、この稿以降は追補となります。

先ずは『ゆりかご』が世に出る過程でお蔵入りとなった資料に関する部分に少し光を当てると致しましょうか。

時代としては本編2の後半辺り、九〇年代前半と思っただければよろしいかと思われます。

先ず一つ目の資料として提示しますのは、

『狂的科学倶楽部』

(魔北葵著 笠倉出版社・九〇年八月一〇日初版)

↓桜桃書房・九四年九月初版)

でございます。筆者が確認したのは笠倉出版社版であったと記憶しております。

手元のメモによりますと作中に一箇所こう言う記述があったとの記録がございますね。

『少年趣味』(ショタコンのルビ)

ただこの場合、愛される、つまり受動としての対象となっていたのは高校一年と思しき男子であり、また女性が彼を愛するという様相を指して上記記述があったことから恐らく『年下趣味』の言い換えではなかったかと考えられます。

ちなみにこの作中においては『やおい』と称する同性愛行為描写もございました。言葉の指し示すものの言い換えが錯綜した結果なのかも知れませぬ。(傍注1)

さて、続きましての資料は雑誌に掲載されたもので

ANIMEDIA COMIC

『ミックブッカー』ほっけー

アニメディア1月臨時増刊号

(学習研究社・九二年一月十五日発行)

三五〜三六ページ掲載

『特別企画』ショタコンのひ・み・つ』

芦田豊雄&スタジオライフ

が、それでございます。

この企画の大部分は後に本編3で紹介致します『THE SYOTAROH』に再録されたのでありますが、割愛された部分にも実は大きな特色がございます。割愛されたのは三五一頁から三五二頁の凡そ九割程度でございますか。

そこに記されていたのはショタコンの簡略な語源解説と往時の『ショタコン』と称された女性達の遇されていた状況説明でありました。

語源解説のモデルに『太陽の使者』版『鉄人28号』の正太郎君が採用されているのは「愛嬌と致しまして、ショタコンと称される女性達がどの様に往時観られていたかと申しますと…あくまでもこの記事においての描写要約であります。男の子を標本にしたり、或いは一方的に愛玩する等欲求処理の道具として用いる或いは観る人々、と認識されていた様であります。

記事中の絵柄はアニメ調に誇張されておりますので陰惨さが漂って参りませんが、筆者が愚考しますにこのくだりは耽美創作誌『JUNE』周辺で見られた様な少年愛玩の様相をイメーシしたのではあるまいかと。

『THE SYOTAROH』に再録された際この記述部分が割愛されたのは、恐らく執筆陣の男子『ショタコン』への配慮故でありましょう。

そして九三年になりますともう一つ資料が登場します。

『がんばれ！女の』河沢田梢

『コミケーショントラード』すたんだぶ編・九三年一月
九日初版所収・六五〜八四ページ

がそれで「ございます」。

主人公(やおい)同人誌作家の少女)のライバルとなる少女が作っているのがシヨタコン同人誌である、と言う描写が出てくるのですね。

作中で語られるシヨタコンの認識とは

『いたいけな少年を裸にしてあんなことやそんなことや
こーんなことまでさせる』

(作品中よりママ抜粋・八二ページ掲載)

というものであった様です。

この認識は第二例と非常に似通っておりですね。やおいVSシヨタコンの対立図式が描かれている事も併せて考えると非常に興味深い例ではあるまいかと思われま

す。
これまで提示した三例を見る限りでは、現在シヨタコンの主流と目されているものと往時提示されていたものとを等号で結ぶ事は恐らく不可能ではないかと短絡しそうになります。そう、この流れで提示されている例の限りでは男性『シヨタコン』発生の余地が先ず無いのです。少年同士と言う描写はやおいの延長線上から派生し得たとしても。

本編2の後半において『現代用語の基礎知識』における記述を提示致しましたが、そこでもあくまでもシヨタコンの主体は女性と提示されておりました。

そこから今日への流れがどう開かれて行ったのか。現在の所この期間についての判断材料が見当たらずまま空白となっております。

少なくとも何かは存在したと思われれます。そうでなければ男子シヨタコンの創作がいきなり発生すると言う

状況は無いでしょうから。

その辺りは追々確認してまいりたいと思います。
竜頭蛇尾の感も「ございますが、この稿は一先ずここで
終わります」。

(二〇〇八年二月二〇日脱稿→二月二二日no)

* * *

傍注一

笠倉出版社より刊行の単行本にて該当部分を確認。

データ

『狂的科学倶楽部』

魔法葵・笠倉出版社 九〇年八月一〇日初版

ISBN4-7730-0528-9

作品初出:コミックマンモスクラブ(セブン新社)

八九年六月号〜九〇年一月号

作品執筆:八九年二月二八日〜八九年十一月三〇日

該当箇所

「少年趣味(シヨタコンのルビ)」↑ 四ページ(第一話)

「このやおいがー!」↑ 三二ページ(第二話)

※ホモ(原文ママ)の少年に対するツッコミ【手書き文字】

「最初にあやまっておきます」。

今回は『やおい』です。すみません」↑ 六七ページ(第

四話)

※第四話

(六七〜八二ページ:Report. 4「変愛」扉頁

手書き文字による自註。

内容はホモ(原文ママ)の少年とシーメールの少年の恋愛。

「弟分達(『こいびと』達のルビ)」↑ 六九ページ

「このラブコメやおい少年!」↑ 七三ページ

手書き文字による台詞相応

ホモ(原文ママ)の少年に向けられた言葉。

『あー惜しい!』

せつかく生でやおいがみれると思ったのに!」↑ 八二
ページ

登場人物(♀)の台詞

それに対して受であるシーメールの少年の『UFO研究
家?』

と言うボケ【手書き文字】も記載。

「ヤマ無し・オチ無し・イミ…」

うう本当にやおい漫画だな、今回。」↑ 八二ページ
頁枠外にての手書きによる作者ツッコミ。

「やおいしてるとこ本当!」

見せてくれるんですかあ?」↑ 一〇〇ページ(第六
話)

※登場人物(♀)の台詞。手書き。

八二ページと同じ発言者。

シヨタコンのゆりかご」追補2

S・X IIIの波紋→枚敷より一言→

ぶどううり・くすい

先ずは、此度イベントに参集参加された皆様様、お疲れ様でした。色々思う所は各々お持ちだったかと思われませんが、とりあえずイベントが終了して一区切りは付きました。

果たして今回の措置の発端となったものの正体や如何に、と言う事で、筆者は一〇年前九八年に世に出た二つの資料を提示して一考に供したいと思えます。

なお、こう言う稿を起しておきながら大変申し訳ないのですが筆者は未だ現場の土を踏んだ事がございません。ですので、あくまでも枚敷席からの言葉であると言う前提の上でお聞き下されれば幸いです。

先ず資料を提示させて頂きます。

「シヨタコン・ワールド」に溺れる男たち」

〔週刊SPA!〕九八年二月十八日号掲載(扶桑社)

四六→四七ページ シヨタケット関連記事(傍注一)

『Pet BOY, s. vol. 5』掲載

(九八年六月二五月初版・司書房)

シヨタケットレポート(主催談話含む)

一七八→一七九ページ

奇しくも一〇年前に、開発コード『S』…シヨタケットサイドが自分達の姿勢について公的に述べた言葉がきちんと活字になって残っております。

ここから色々な思いを読み取る方もお出ででありましたよ。

少なくともこの二つの資料に目を通す限りでは、シヨタケット側はシヨタと言う概念に對しかなりの融通性を以って対峙している様に見受けられます。少なくとも二次元の領域においては、その点においては八一年

以降』ふあんろード』で提唱されたシヨタコンの概念をそのまま受け継いだ姿勢であると認識出来ましよう。只、こうして回顧している中で捉えるならばこの発言は規制と言う足枷がない前提の上で発せられたものであると言う事を考慮せねばなりません。

この発言から一年半後の二〇〇〇年、シヨタケットは一回休息をとっております。時流の影響かどうかは定かではございませんが(傍注二)。その時は無関係の有志によって場が設けられました。(傍注三)

そして、二〇〇一年より再びシヨタケットは毎年五月五日に開催される様になった訳でございますが、その歩みと同時にシヨタの性描写は静かに濃厚化の一途を辿った訳でございますね。方向性が明確ではなかった規制に対する一種の反動であろうかと考えられますが。

その中で主催者サイドはどのような意識を以ってジャンルと対峙していたのか。

奇しくも筆者の手元にはシヨタケット11及び12のカタログがございます。ここから何が読み取れないかと頁をめくってみましたが…もの見事に韜晦されておりませぬ。明確な方向性を示す言葉は表に出ておりませぬ。只一言、「時節柄、あまりハメをはずさないようにお願いいたします。」と言う注意文を除いては。(傍注四)

然しながら、方向性を示そうとする姿勢はカタログ企画において明示されている様です。そこからは性描写ではなくそれ以外の描写でシヨタを浮き彫りにしようと言う姿勢が見え隠れしておりますから。

そして、時間軸は現在に戻ります。

伝聞によりますとS・X IIIの現場においては自ら提示した規制を遵守する為の手順進行に些か難があった模様です。もっともこれは規制云々の話ではなく危機管理能力云々に類する指摘が適切ではあるまいかと愚考します。

一考すべきは開催から十四年を経過して漸く明確に

提示された主催側の姿勢に参加者がどう対峙するかでありましよう。

筆者は実際の所、S・X IIIの志向性も有りではないかと考えます。それもまたシヨタの一つの形でございませぬ。

只、施設の運営姿勢に乗じた規制を布くと言う様な形でシヨタの定義を一方的に自縄自縛に陥らせようとした事については当方の姿勢を一端横に置いて敢えて一言苦言を呈したく、この稿を起した次第でございます。

シヨタケット12まででカタログ紙上で暗黙に提示してきた理念を実践しようとする本気で考えるのならば、会場全体を十八歳未満入場禁止の領域に指定し、性描写の黙認を暗に匂わせると言う必然性は無い筈でございますましよう。

会場を十八歳未満入場禁止にした措置について、施設の規制提示と参加者の要望に板挟みになった上で生じたジレンマの発露ではあると容認する事も出来ましようけれども。(傍注五)

そう加味して考えたとしても、矢張り残った波紋は小さくない、と筆者は愚考致します。

(二〇〇八年五月五日脱稿↓)

傍注一

九八年五月五日に開催されたシヨタケット4カタログ「はじめに」文中では主催・伊寿墨眼仁奈がこの取材の件を受けて『良い子にしないで』とSPPOーが取材に来ちゃいますよ?!』とごまかしている。

傍注二

九九年五月五日に開催されたシヨタケット5カタログ「はじめに」文中から窺える主催・伊寿墨眼仁奈の姿勢は時勢を韜晦しつつ場を護る方向性を向いていた様なのだが…。

傍注三

『00.5.5.少年系!!』
<http://www3.t0/0055>

東京において二〇〇〇年五月五日開催された。

傍注四

シヨタケット11及び12カタログ

三ページ目掲載「諸注意」冒頭文節より引用。

傍注五

なお、S-X IIIカタログ諸注意文中に於いて恐らく初めて会場内撮影禁止及び無許可取材禁止の旨が明確に記載されている。

主催挨拶が例の如くの韜晦加減であるのに対し諸注意文面が杓子定規と言う感じに変貌しているのもS-X IIIカタログの特色であるのやも知れぬ。

※二〇〇九年八月十七日追記

S-X III開催後、以下の動きがあった。

シヨタケット13 R

二〇〇九年一月二五日開催 於・綿商会館四階

* 小規模開催

* 午前午後二部制。サークル入替にて対応

★ シヨタケット14

二〇〇九年五月五日開催 於・綿商会館四階十五階

シヨタケット13 RはS-X III開催当日にサークル参加者にのみ開催が告げられていたとの証言あり。またその時点では二〇〇八年秋開催予定であるとされていたとの事。最終的に開催期日について言及されたのは二〇〇八年八月下旬の事であった。またシヨタケット14開催前は公式サイト運営にやや不明瞭な点が視られ、殊にサークル参加者に対し不信感を抱かせてしまう状況もあった。場の提供と明朗な運営、この両立の難しさを体現してしまつた一幕であろう。

◆二〇一〇年一月追記

シヨタケット14のカタログを確認する機会を得た。冒頭に配されたのは14と言う数字に託けて中二病と言う流行語を持ち出し、暗にシヨタII中二病の産物と誘導した上で言い訳をしたい様にも読み取れる挨拶文。若しかすると主催・伊寿墨眼仁奈は、自分はシヨタではなく(韜晦や毒舌を得意とした)おたくであるとの一文で宣言したかったのかも知れない。なお、同カタログに通例存在する筈のおまけマンガ等は配されていない。

そして一月一日深夜(時刻としては二日に入った所)、シヨタケット15の開催が公式サイト上で告知された。

シヨタ「ン」のゆりかご追補3

電脳「の場」〜クリスマスウェブ、そして…

ぶらぶら〜くすこ

こうやって書面にて色々追想させて載っている筆者でございませうが、出自はと申せばインターネットウェブの一隅で一次二次を問わぬ筆編創作を出力していた身であります。同人誌に触れる機会を持つていましたが果たして純粹に同人作家と定義できるかどうかは人により判断の分かれる所でありませう。

その身故に気掛かりがひとつ残っております。

本編4では諸事情によりインターネットウェブ上でのシヨタ創作の状況について詳しく触れませんでした。編集の趣旨と方向性もございませうから。

そこでこの稿でしばし追憶がてらあるインターネットウェブ上で展開されたイベントの事を振り返り、往時の状況判断の一助として供したいと思います。

インターネットウェブ上でイベントを開催する。

一口に申し上げれば非常に簡単な事であるかの様に思われます。少なくとも生身を用いず、そして作業にある程度の(電脳補助による)素早さを確保できる為、作品と参加者さえ集まれば容易に成功を導く事が出来るであろうと。

そこで筆者は申し上げます。そう言う考えは絵に描いた餅そのものでありますよ、と。参加者と作品と場所さえあればイベントが成立するというものではありませんから。

インターネットウェブ上でイベントを開催するという事は、事務処理の部分がある程度電脳で簡便化しただけの事で、生身の世界で同人誌即売会IIイベントを開催するのとなんら変わらぬ労苦を背負う事でありませう。所謂「祭」なら何処かで始まって三々五々と参加しつつ盛り上がり、そして皆が飽きれば一抜けたを繰り返して徐々に終息する事ができるでしょう。しかしイベントと言う形になれば始まりと終わりを明確にしな

いと場が残らないのです。

筆者はかつてインターネットウェブ上でクリスマス前後の期間限定で開催されていた『クリスマスウェブ』というイベントに二〇〇三年から五回参加しております。

クリスマスウェブ跡地(閉鎖空間)

<http://marisain.net/sign/xmasweb/>

このイベントを主催し、物理的に場を維持していたのは創作小説サイトを運営していたとは言え(漫画を中心とした)同人誌の世界では読み専といわれる立場と認識されていた一個人でした。しかし彼は、先立つ事二回開催されていたこのイベントを前任者から引き継いで以降、イベントを健全に運営して行っただけに留まらず、発表される作品の幅と門戸を広げつつシヨタの灯を絶やさぬ様常に「最善を尽くしていました。全ての参加者作品に満遍なく拍手が送られる様に」。

もしあの場が無ければ筆者は創作についての実験精神を半分失っていたでしょう。他の参加者にとってもそうであつたらうと愚考します。

そのクリスマスウェブも都合七回にて終了した訳ですが、それは彼のひとつの思いから出た結果でした。

継続も大事だが、新陳代謝も大事である、と。

以降後継は未だ現れぬ様ですが、もしその萌芽があつたならば、筆者は山を賑わす枯れ木として参加する事でしょう。ささやかな一助として。

では現在インターネットウェブ上にそれに該当する様な場があるのかと問われれば、筆者は軽くためらいながら是と答えます。

絵画作品発表を交流の軸としたSNS・PIXIVが恐らくそれに該当するだろう、と。

但しPIXIVはシヨタに特化した場ではありません。あらゆる作品が集まる場であり、シヨタはその中のひとつの流れに過ぎないのです。その一点を忘れシヨタ

至上主義を推し進めようとすれば歪みは当然生じましよう。

その他お絵描き掲示板或いはお絵描きチャットを軸とした個人運営の交流サイトも散見されてますが、継続は良しとして育成に直接繋がるかと言えば素直に頷き難いのが現状です。

生み出されたシヨタ創作者を作品として観るのではなく商品或いは流通製品として認識する方が徐々に増えている感がこぼれますので。

物理的な距離を跳躍する事の出来る電脳の間であるからこそ、自分好みの作品だけを作らせるパトロン然として振舞うのではなく、伸ばすべき所は伸ばす様に創作者を遇する暖か味が欲しい、と感じるのです。

筆者がクリスマスウェブで感じていたのは、そう言う静かな暖か味でしたから。

(二〇〇九年八月十七日脱稿)

『1』『3』初出…「シヨタスクラッチ」カタログ1〜3
『4』は掲載予定稿(二〇〇七年七月三十一日時点のもの)をそのまま流用し、暫定版刊行後傍注を増補した。

増補稿1及び2はWEBより転載。3は冊子増補改訂版用の書き下ろし(後にWEB掲載)。

発行に際し本文傍注は加筆訂正増補し、図版資料は省略した。

「シヨタ」のゆりか」

発行者 ぶどううり・くすこ (葡萄瓜XQO)
サークル名 「ひやかしぶどう」

二〇〇七年九月十六日

CUTE☆3にて初版(暫定版)頒布

二〇〇八年一月十一日

CUTE☆5にて増補版頒布 後に改訂

二〇〇八年十二月三〇日

「ミケット」75にて増補改訂版頒布

二〇〇九年八月十四日

「ミケット」76 合わせて冊子改訂版頒布

二〇〇九年九月二〇日

CUTE☆7にて冊子増補改訂版頒布

二〇一〇年三月二二日

CUTE☆8にて追増補冊子版頒布

無償頒布

発行者がぶどううり・くすこである限り
今後いかなる版に改訂されても無償頒布。

©ぶどううり・くすこ 2006-2010

「シヨタ」のゆりか」

<http://shotayurikago.omiki.com/>

xqo_gm@yahoo.co.jp

Special Thanks

(順不同代表のみ 敬称略)

逆風真言

Maoca.

あきらん

紺田翔太

じやぐ

11

藤堂冬美香

永山薫

このコラムを読んで下さった皆様

歴史の足がかりを遺して下さいました先人達

シヨタスクラッチ実行委員会

氷上零@CUTE☆

ばろん赤坂

お邪る魔る魔る

伊藤剛

吉本たいまつ@おたく・やおい部

まいなす

ウサギの時計

神観諒

まこ&歩重@CAFE 801

◆発行者の意思により

左記各位に納本寄贈を行った◆

国立国会図書館

京都国際マンガミュージアム

大阪国際児童文学館

米沢嘉博記念図書館

CAFE 801(カフェハチマルイチ)

〈以上冊子増補改訂版を納本・寄贈〉

印刷…福井タイプ印刷株式会社

<http://www.pageprint.jp/>